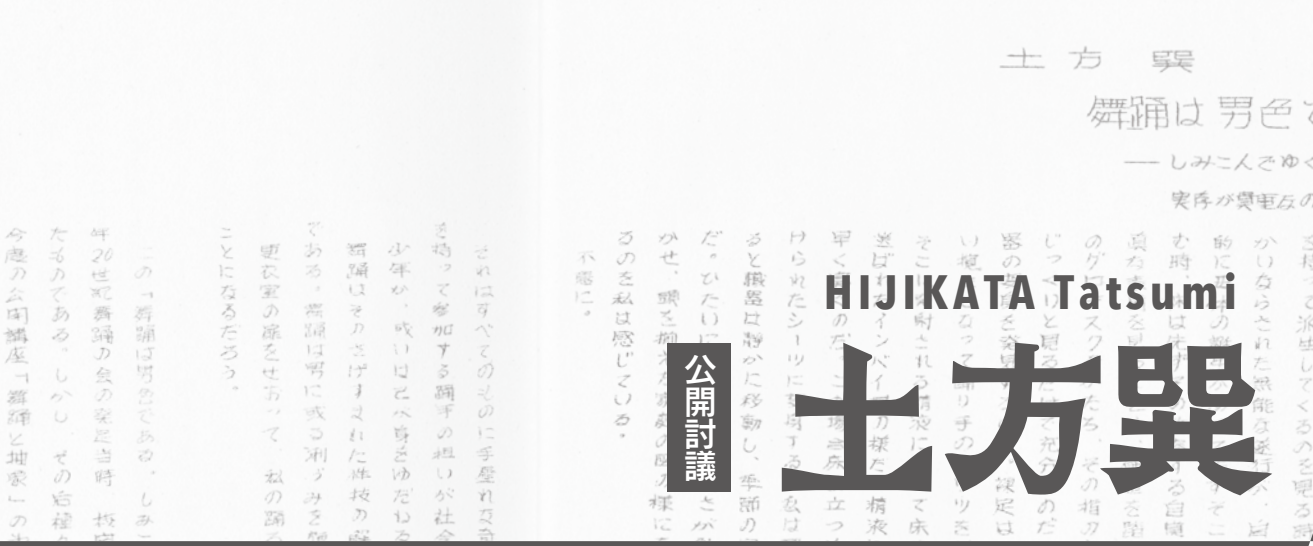


HIJIKATA Tatsumi

公開討議

土方巽 ARCHIVE アーカイヴ

2019 年 1 月 21 日（月）18:30-21:00

慶應義塾大学三田キャンパス　東館 5 階会議室

Monday 21 January 2019 6:30 pm – 9:00 pm
Keio University (Mita), East Research Building 5F Conference Room

参加無料・入退場自由
Admission free, come and go anytime

これまで 8 年にわたって、土方巽の命日 1 月 21 日には、「土方巽を語ること」を実施し恒例としてきました。2019 年はこの恒例のイベントではなく、新たに公開討議として<土方巽／アーカイヴ>を開催します。
2018 年は慶應義塾大学アート・センターのアーカイヴ設置 20 周年でした。記念事業として、アーカイヴをめぐるシンポジウムを開催しました。もとより、シンポジウム開催でアーカイヴをめぐる問題が軽減したわけではありません。アーカイヴのためのアーカイヴ論は用意できますが、アーカイヴの現実には適わないからです。
近年、土方巽への問いかけが、新たな関連資料の発見や提供とともに続いています。土方巽アーカイヴが、アーカイヴという装置に fixed star のように位置しつつ、周辺にさまざまな planet が現れ、時に接着して fixed star を膨張させるかのような状況です。
舞踏研究をより深化させるために、未知、未収集の資料への接近は不可避であり、アーカイヴの使命は、何といっても資料の収集と公開の連続にあります。とはいえ、その使命を語ることでは収まらず、そのプロセスにはさまざまな事象が生起し、関係が発生し、対応する活動が求められることも確かです。
今回の公開討議では、その constellation（見取り図）を紹介し、資料群を検証し、歴史の探索を試みるとともに、土方巽への問いかけに答える位置に立つことをめざし、あるべきアーカイヴの方向を再考します。

発言者：池宮中夫　木部与巴仁　吉増剛造ほか
Guest Speaker: Nakao IKEMIYA, Y. KIBE, Gozo YOSHIMASU

土方巽アーカイヴをサーキュレートする資料体が次々と現れています。
- **高井富子コレクション**
- **池宮信夫コレクション**
- **石井満隆コレクション**
- **辻村和子コレクション**
- **副島輝人コレクション**
- **吉本隆明コレクション**（音声・映像記録）

それぞれのコレクションの資料がアート・センターの収蔵庫に格納されています。まだ全貌が見えない長尾一雄コレクションも想定して、本討議では、それぞれのコレクションの特徴や意義から、さらには今後コレクションをどう扱い、どう装置化すべきか、具体的な展望と処理についてまで考えることになります。

問い合わせ：慶應義塾大学アート・センター［担当：森下］
TEL:03-5427-1621　moris@art-c.keio.ac.jp

Information: Hijikata Tatsumi Archive

主催：慶應義塾大学アート・センター、ポートフォリオ BUTOH
企画：慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ
協力：土方巽アスベスト館、20 世紀舞踊研究会

「土方巽アーカイヴ」も、土方巽記念資料館の活動の成果を踏まえつつ、時代の新たな要請に応える機関として位置づけられよう。アーカイヴとしては、土方巽その人とその創造、そのアルファからオメガまでの情報化に挑んでいる。その最大の特長はデジタル・アーカイヴということにある。土方巽の舞踏のデータがジュークボックス（＝「デジタルの箱」）に収められ、網の目状にリンクされた情報がオンラインでの検索、調査に供されることになる。現在、文献資料、公演資料、舞踏譜、関係者の証言、写真、映像などから成るデータベースの制作を急いでいる。デジタル情報として新たな生成を経て発信される情報は、土方巽研究や同時代の芸術研究に寄与することは確かであろう。

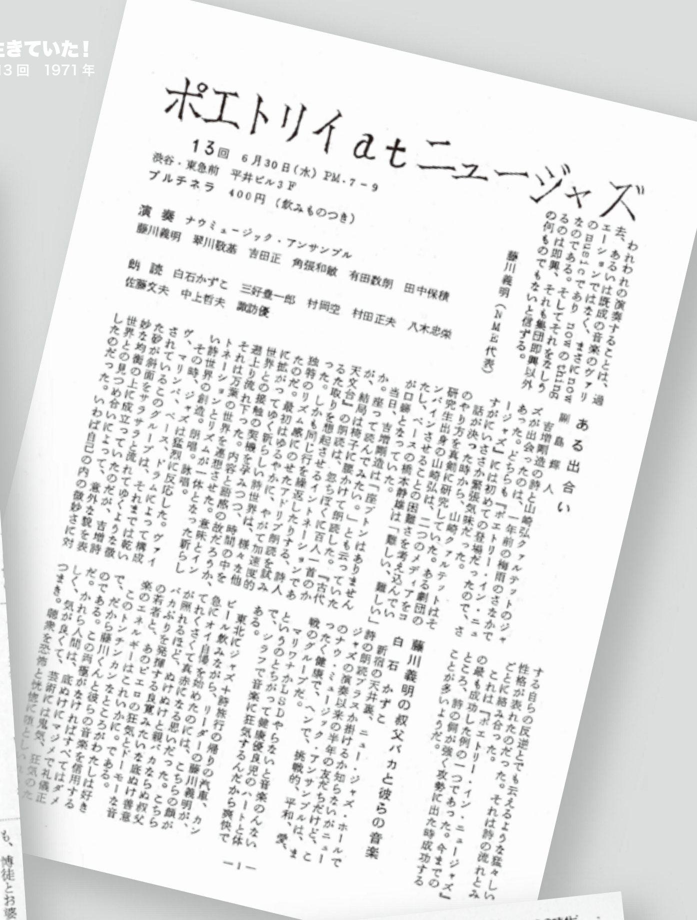
土方巽の舞踏創造の方法は秘儀的でありながら、その実、解析的でメカニクルであった。しかし、土方巽は舞踏を体系化も理論化もしなかった。ただ「舞踏」という不分明な概念を残した。舞踏家にとっても研究者にとっても、それは「不自由な自由」にほかならないが、アーカイヴの可能性はそこにある。舞踏はいまだ定義されえない芸術である。デジタルの箱にすべてが整序化されて収まるものではない。収めようとしてはみ出すもの、それが何であるのか、アーカイヴはまたそれを知る実験でもある。

目下アート・センターは研究アーカイヴとして、「土方巽アーカイヴ」、「ノグチ・ルーム・アーカイヴ」を構築中である。しかし、研究アーカイヴが備えるべきシステムはかなり複雑になる。本質的な課題として、少なくとも三つの点をあげよう。研究アーカイヴでは、まず第一に、諸資料との「感性的」な触れあいが成立しなくてはならない。「知」を発動させるためには、情報やキーボードを一度離れてみる必要があるからだ。アーカイヴは、資料との触れあいの空間でなくてはならない。第二に、人間の創作活動を把握するためには、活動の生成的（ジェネティック）過程を追体験できなくてはならない。したがって、資料の分類システムにしても、図書館の採用する、いわゆる普遍分類システムは有効ではない。独自なシステムが不可欠である。第三に、人間の想像力を特徴づける根本は、イメージの飛躍にある。言い換えれば、メタファー的で連合的な特異な不連続性にほかならない。諸資料のなかに、資料としては不連続性でありながら、イメージとしては連続するモティーフをあとづけたい。

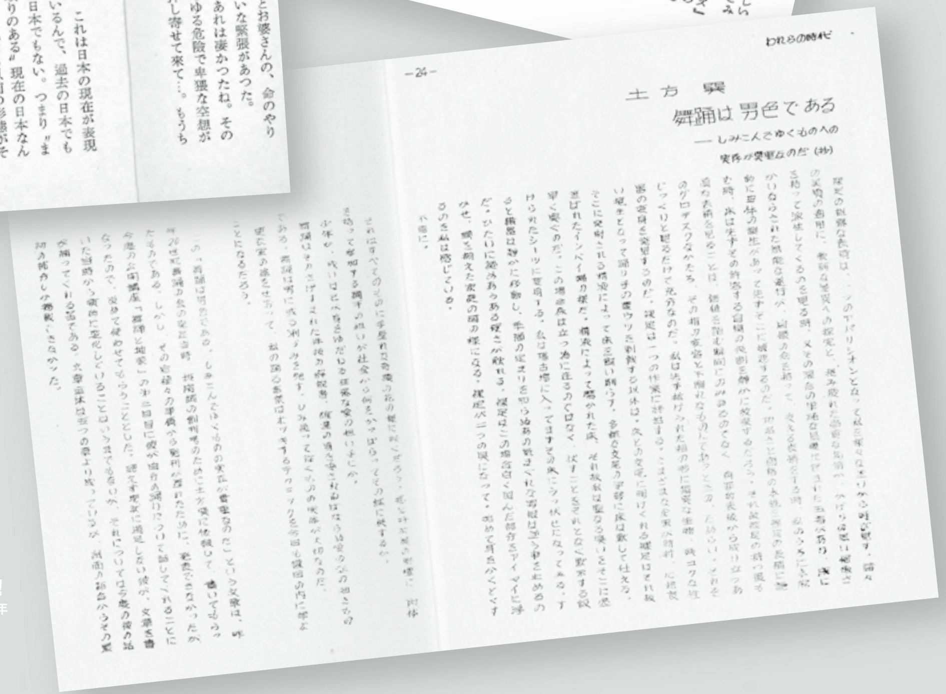
こうした課題に応えてくれる研究アーカイヴ・システムの開発は、ハード、ソフト両面でなかなか実現がむずかしい。適切なシステムを構築するために、図書館情報学や理工学部の専門家の支援を受けなければならないし、なによりも一次資料の内容を把握するための気の遠くなるような地道な資料整理作業を実施しなければならないからである。アート・センターは学内学外の多くの方々や機関のご援助をえて、蝸牛の歩みではあるけれども、大学という場に新しい知的空間を創出したいと努力をつづけている。今後とも、ご支援を賜りたくお願いする次第である。

舞踏と呼ばない舞踏？
『新生活』第14巻・第2号　1964年

肉声だけが生きていた！
『ポエトリー at ニュージャズ』13回　1971年



20世紀舞踊、発見せり！
『20世紀舞踊』第2号　1959年



デジタルジュークボックスは有効か？
ARTLET 第12号 1999年